

強いられた教育 (翻訳)

筆者：法学博士 George Lamborn West

訳者：大橋敬三

1. 訳者のことば

1) ジョージ・ランボーン・ウエスト博士 (Dr. George Lamborn West) は、1929 年 (昭和 4 年)、米国テキサス州サン・アントニオに生まれ、テキサスミリタリー高等学校、テキサス法科大学を卒業後、法学博士の学位を修得、地方検事を歴任、さらにメリーランド大学等の教授を歴任され、現在はダラス市で法律事務所を開設。少年時代にラフカディオ・ハーン (小泉八雲) の手紙を図書館で読んだことが機縁で日本に憧れ、昭和 44 年秋、日本マネジメント協会の顧問として来日された。邦訳された論説・講演に「皇高生よ、日本の為に」、「日本国憲法改正試論」、「憲法を改めねば国危し」、「強制された“憲法”」、「憲法改悪の強要」、「強要憲法」、「改憲への“昭和維新”を提唱する」等がある。

2) 同博士は、この論文のなかで教育勅語に明治精神が述べられているとし、その明治精神は、アメリカの開拓者精神 (FRONTIER SPIRIT) と相通じるものがあり、しかも現在、アメリカでは、その開拓者精神が失われつつあり、代わって、“PERMISSIVENESS” (自由裁量を許すこと、寛大で大目にみること) が教育に導入され、それがアメリカ社会を荒廃に導きつつあり、しかも、この“PERMISSIVENESS”を導入したのは経済的利益のみを追及するユダヤ人達で、彼等は、米国のみならず全世界で彼等の野望である経済的征服を図っており、日本がアメリカの轍を踏むことのない様警告すると共に、憲法を改正し、教育勅語の精神を復活する必要があると論じている。外国人であるアメリカ人有識者による、きわめてユニークかつ興味ある論文であるので翻訳した次第である。

3) 原文別添

2. 翻 訳

強いられた教育

法学博士 George Lamborn West

私は、アメリカ人で、昭和4年に生まれ、テキサス南西部の非常に雨の少ない地域で育ちました。父は数個所に牧場を持ち、母は教師をしていました。私は、ミリタリー高等学校（米国にある軍隊式教育を取り入れた私立の高等学校で、優れた学校が多い。）で教育を受け、テキサス大学で歴史と法律を専攻し、昭和44年、東京の、ある法律事務所の顧問として日本に来るまで、テキサスで弁護士を開業し、また、カレッジで教えていました。

私は、昭和39年まで、一人の日本人とも会ったことがなく、初めて日本に行った時、私が会った多くの日本人と私との間に存在する文化的、歴史的、言語的障壁を貫いて根本的な信念と思考において類似点があるとは考えていませんでした。

勿論、日本人は心の温かい、親切的な、きわめて礼儀正しい国民であると思いました。それは、私が引け目を感じる程でした。日本人が、私のとった不作法な態度にどの様に我慢したかは、私の理解を越えるものでした。長年、私は、取り引き相手に、あえて私を嫌悪させるような不作法な態度さえもとり、彼等を試してもみました。

昭和45年、私は、始めて舟越正道教授（注1. 参照）に会いました。先生は、私を何度か伊勢に招いて下さり、先生や先生の弟子達と夜遅くまで討論いたしました。そして、先生が彼の真の精神を弟子達に教えこもうとしておられる真しな姿に感動いたしました。

ほとんど同じ頃に、私は、平泉澄博士（注2. 参照）に紹介されました

が、私は、その時のことを決して忘れることができません。東京の天気は非常に寒く、私は、広い暖房の無い部屋に案内されました。先生は、筆の手も自由に動かすに耐えない程の寒さの中で、「こたつ」に座って字を書いておられました。私達は一時間程、話し合いましたが、私は、この世で第一級の人物と会う光栄に浴し、深い感銘を受けました。先生は、広く世界について話され、また、各時代についての事象を断片的に取り上げられましたが、私は、多くの事柄について自分がいかに無知であるかをさらけ出し、恥をかきました。しかし、先生は、私にもっと勉強させようと、わざわざそうされたのだと思っており、その結果、私は、さらに勉強に励むようになりました。

この対談から得た最良の収穫は、「明治精神」という私にとって新しい言葉と思想でした。その当時、私にはこれを正確に定義付けすることができませんでしたが、私は、先生が確かにこの精神を持っておられるように感じました。また、舟越先生や私が会った多くの人達も、その精神を持っておられるように思いました。この人達は、明らかに私も同じ様な精神を持っていると考えていたようです。しかし、私は、昭和52年の再度の訪日まで、その精神を定義付けする適切な言葉を見付けることができませんでした。

ところが、私の親友の一人が、私の訪日を歓迎して開いて下さった歓迎パーティの席上で、公文書らしい文書を下さいました。それは教育勅語の写しであったのです。私は、この勅語の英訳を手に入れ読みましたところ、私の眼は直ちに勅語の次の文句に注がれたのです。

「・・・・・・・・・・父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信シ恭儉己レヲ持シ博愛衆ニ及ホシ学ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ知能ヲ啓発シ徳器ヲ成就シ進テ公益ヲ広メ世務ヲ開キ常ニ国憲ヲ重シ国法ニ遵ヒ一旦暖急アレハ義勇公ニ奉シ・・・・・・・・・・」

私は、やっと明治精神の意味を理解することができたのでした！

明治天皇は、勅語の中で、私の人生の形成期において教わった真髄、そして事実、私の人生全体を形成させる真髄となったものを述べておられたのです。その勅語は、日本国民と日本帝国を対象にしたものですが、私は、それが全ての人類に対しても当てはまるものと確信しております。

アメリカ合衆国には、このような言葉を定めた特別な文書はありませんが、1800年代から1900年代初期にかけて、全米各地で、それに類似する精神が私達の生活に生かされておりました。私は、それを開拓者精神（FRONTIER SPIRIT）という言葉で言い表したいのです。この精神が、私達の全ての教育の根幹を成しており、当時、学校のみならず家庭においても、この精神にもとずく教育が行われていました。

私は、明治14年生まれの父と、明治23年生まれの母に育てられました。父母は、このような世代に育ち、また、最も近い隣人が12kmも離れたところに住んでいるというような人口の希薄な地域に住んでいました。生き残るためには、この精神に従わなければならなかったのです。

1900年代初期の米国の初等学校教育は、読み、書き、算数から成り立っていましたが、さらに、学校では、学校を去ったあとも一生を通じて修練を続けることができるような人間を育てる公の訓練の場でもありました。

教師は、自らが選んだ教職を遂行するに足るだけの金銭的関心しか抱かず、彼等の教え子のために、その全てを捧げる献身的な人達でありました。

ところが、John Dewey（注3. 参照）なる人物が登場し、学校では、諸事適切に取り扱われていないと決めてかかり、また、それまで両親の教育に委ねられていた事に対しても口をはさむようになったのです。しかも、愚かにも殆どの親たちは安易な道を選び、自らの責任を放棄し、学生たちに“PERMISSIVENESS”（自由裁量を許すこと・寛大で大目に見ること）を許すこととなったのです。

米国では、教育は独立学区と称される政治的色彩を持った、ごく地方的レベル単位で実施されており、しかも、その学区は急増しており、時には

一万人のカウンティー（郡）に 25 学区も存在する始末です。教育に関しては、中央政府機関によって定められた全国的統一基準というものはなく、わずかに大学入学試験方法に限ってのみ、ごく最近全国的統一基準が導入されたに過ぎません。

初級及び上級の各学校は、かなり広い範囲で、それぞれ独自の卒業資格を決めており、大学を含むどのレベルの学校においても、卒業のための全国的統一基準というものはありません。

さて、この新しい“PERMISSIVENESS”は、学校に、より多くの機能をもたらす結果となったのです。例えば、音楽隊、フットボールチーム、女子のドリルチーム等であります。そして、学生に、より多くの時間を学校のグラウンドで過ごすことが求められるようになったのです。

私の意見では、米国の公共の学校制度は、巨大な子守り産業と化し、学生は真の学問を学ぶことなく、学年から学年へ易易として進級し、卒業後は、一生、政府の補助金に依存したり、失業したり、犯罪を犯す生活に入り込む傾向を持った軟弱で無教養な若い成人集団を育てている始末です。また、“PERMISSIVENESS”は、初等学校における選択教科についても早期の改革をほのめかしています。例えば、音楽隊や工作や料理等ホームスタディないし、少なくとも課外活動としておいた方がよいと思われる教科に至るまで卒業単位を与えようとしているのです。教師は、初等学校レベルから労働組合員となり、また大学では、教える教科の知識ではなく、教え方の知識のみ持てば良いとする考え方に立って、「教育学」の学位を与え、教師として送り出してくるのであります。

私は、第 8 学年生のとき、1 年間文章を図式化して英語を学びました。また、テキサス大学では、英語の必修課程をとりましたが、その教え方は近代的記憶方式によるものであり、そのため時間を大いに節約することができ、その分、他の重要な学科の勉強に当てることができました。

米国では、昔は、教室での礼儀作法は厳しく、極端な場合には、躑のた

めに体罰を受けることすらありました。現在では、教師は学生に触れることすらできません。そして、殆どの学校で規律が欠如しており、中学校やそれ以上の学校では、学生が学内に密かにナイフやピストルまで持ち込んだり、さらに、麻薬が大変流行し、それが下級の学校にまで広がっている始末です。

服装規則では、男女を問わず髪の高さに制限をつけず、教室での服装も、ヒッピースタイルが許される程であり、教師たちは、ぼろ入れ袋のような服装で現れる始末です。これと対照的に、私は、日本のある高等学校では、学生が制服の身だしなみを正すことができるように階段のところに鏡が置いてあったことを思い出すのであります。端正さと、学業に対する誇りを持っていた時代は去り、代わって、学校に最小限出席する以外は何んの学業も積まないで成人になってしまうような人間を作る官僚的かつ子守りの教育が行われるようになったのです。これが John Dewey が米国の教育にもたらしたものです。どうしてそうなったのかが問題です。

夥しい数の独立学区が存在していることを想起して下さい。これらは、財産税によって支えられており、また、学校の建物やグラウンドの改善のために長期利子付き債券が個人向けに発行されていることを知っていただきたい。こうした負債の利息支払いは、1979 年で 25 億 2800 万ドルにも達しているのです。学校活動を広げるためには施設の拡張が必要となり、そのためには建設費が必要となることは明らかであります。そこで、利己的な金盲者達が米国の教育制度へ侵入してきたのです。彼等は、その宗教的信念という口実のもとに、どこでも直ぐに市民権を取る能力を持っており、世界の人々の犠牲において、彼等自身の利益のために、世界に勢力を拡大しているのです。この同じグループが、日本に 1946 年の憲法を持ち込んだのです。そして、彼等は、常に経済的利益を求めて世界を蝕んでいるのです。

この教育の近代化の副産物として、米国は、急速に人間性を失う方向に

導かれていったのです。“PERMISSIVENESS”という教育に対する基本的考え方の結果、学生達も同様な考え方に染まり、家族、家庭、国家への義務、謙虚さ、礼節等すべてが忘れ去られ、失われたのであります。個人の偉業に対する誇りは、あくなき金銭追及や「便宜主義」に屈することとなったのです。さらに、新しい教育の副産物には、同じグループによる一国の産業・経済の征服があり、私の意見では、彼等の主たる関心は、最初から貸し金の利息であります。中世ではこれを“Usury”（高利貸し業）と称していました。嬉しいことには、米国には、今なほ、彼等の掌中に入っていない若干の私立学校があり、この新しい制度が導入される以前に公立学校を卒業した多くの米国人（但し、これらの人達は老齢化しつつありますが）がおり、さらに私が「開拓者精神」と称したものの、実は教育勅語に明快に述べられている「明治精神」と同じものを体し、博士号を有する多くの私立学校卒業生が多数いることであります。

皆さんは、何故アメリカ人である私が、この論文を日本で発表するために書いたのか自問なさるでしょう。私は、次のように言うことができます。

日本の公共の教育に関する現状は、決して樂觀出来ないということです。憲法の改正が行われない限り、また日本の全ての学生に教育勅語の精神を復活させない限り、更にまた、多くの触手を持ったユダヤの徒党を日本から追い出さない限り、日本人は、確実に起こる事について、なにも理解していないということであります。数か月前に、幣原道太郎名誉教授が、「あるユダヤ人のさんげ、日本人に謝りたい」（モルデカイ・モーゼ著 久保田政男訳）と題する本を送って下さいました。この本は、アメリカのある一人のユダヤ人が、彼と同民族のユダヤ人達がどの様にして、また何故ある種の事件を起こし、歴史を彼等の都合の良い様に塗り変えていったかを解明しています。この本は非常に良く書かれており、日本が30年以上にわたり直面した問題を理解するのに必要な書物として全ての人にお勧

めします。ただ、この本で欠けている事は、取り上げている事が全て過去の歴史だけで、ユダヤ人達が、世界の経済的征服を目指して、全世界、とくに米国において同じ手口の活動を今なお継続していることを説明していないことです。

日本のより多くの学者や人々が、よく見える海面上の氷山の一角のみならず、その下にかくれている根底に潜む、とてつもなく大きな問題に直面していることを理解されんことを心から祈る次第であります。

注1. 舟越正道氏

故人。大正8年11月鳥取県に生まれる。波波伎神社宮司。剣道7段。学校法人松柏学院理事。皇学館大学助教授。昭和50年4月没。著作に「剣と人」等あり。

注2. 平泉澄博士

故人。明治28年2月福井県に生まれる。歴史学者として著名。東京帝国大学教授、文学博士。終戦と同時に退官。著書に「萬物流転」、「伝統」、「日本の悲劇と理想」、「首丘の人」他、多数あり。

注3. John Dewey

1859～1952。アメリカの哲学者。プラグマティズムの大成者として概念道具説を主張し、新しい行動的・自然主義的ヒューマニズムによって、進歩主義教育の創始者となる。

3. 原 文

COERCED EDUCATION

By : George Lamborn West,
B. A., LL. B., J. D.

Granted, I am an American, born in Showa 4 and reared in a semi-arid area of Southwest Texas, whose father owned several ranches there and whose mother was a teacher, schooled in a military high school and educated in history and law at the University of Texas, who practiced law and taught college level in Texas only until I went as "Of Counsel" to a law firm in Tokyo in Showa 44. I had never met a single Japanese until Showa 39 and at that time I went to Japan for the first time I could not conceive that there could be any similarity in basic beliefs and thinking that could penetrate the cultural, historical and language barriers existing between myself and the many Japanese I met there.

Of course I found the Japanese warm, hospitable and extremely polite (so much so that I tended to develop an inferiority complex). How they could put up with the gauche manners I displayed was more than I could understand. For many years, in my dealings there, I even attempted to actually be impolite and go out of my way to cause the people I dealt with to dislike me, thus testing them.

In Showa 45 I first met the late Professor Masamichi Funakoshi who several times invited me down to Ise to visit him and talk in long night sessions with his students. My behavior was purposely abominable yet still there penetrated through the difficulties of interpretation the true spirit he had and with which he was imbuing his students.

At almost the same time I was taken to meet Dr. Kiyoshi Hiraizumi and I will never forget the occasion. The weather was very cold in Tokyo and I was ushered into a large, and strange for me, unheated room where he sat at a Kotatsu writing calligraphy in conditions that I would have found intolerably cold for flexion and use of the hands. We engaged in approximately an hour of conversation and I felt deeply impressed, for I knew I had just received the honor of meeting one of the very few foremost minds ever in this world..

He had led the conversation over the world at large and skipped intermittently through time periods and shamed me by exposing my complete ignorance of so many matters but I will always feel that he did so to cause me to study more and as a result I have endeavored to do so.

The one paramount thing or thought or phrase that I came away with from that conversation was a new term or phrase, namely, MEIJI SPIRIT. I could not define it but I knew he had it. I also knew that Funakoshi sensei had it and that so did any many other people I had met.

As later events proved, these people evidently thought I had the same spirit, though until Showa 52, when on one of my trips to Japan, I could not find words to define it.

On that occasion I was sitting at a dinner party given in my honor by one of my intimate friends in his home and I was handed or presented a very official looking paper and told, through the interpreter, that this was a facsimile of the Kyoiku Chiyokugo, meaning the Meiji Rescript of Education. My reaction was non-committal until I was handed a multi-language translation of that document and immediately my eyes fell on these words :

“.....BE FILIAL TO YOUR PARENTS, AFFECTIONATE TO YOUR BROTHERS AND SISTERS ; AS HUSBANDS AND WIVES BE HAR-

MONIOUS, AS FRIENDS TRUE ; BEAR YOURSELVES IN MODESTY AND MODERATION ; EXTEND YOUR BENEVOLENCE TO ALL ; PURSUE LEARNING AND CULTIVATE ARTS, AND THEREBY DEVELOP INTELLECTUAL FACULTIES AND PERFECT MORAL POWERS ; FURTHERMORE ADVANCE PUBLIC GOOD AND PROMOTE COMMON INTERESTS ; ALWAYS RESPECT THE CONSTITUTION AND OBSERVE THE LAWS ; SHOULD EMERGENCY ARISE, OFFER YOURSELVES COURAGEOUSLY TO THE STATE.....”

NOW I AT LONG LAST UNDERSTOOD THE MEANING OF MEIJI SPIRIT.

Meiji Tenno had set down in this document the very essence of what I had been taught in my formative years and which had made so lasting an impression as to have shaped my entire life. Though in that document he applied it to Japanese and the Empire, I had been brought up to believe, as I later learned he did, that it was for all mankind.

We in the USA never had the words set down in a specific document but in all parts of the country, those words applied during the 1800's and into the early 1900's to all of our lives and I use the term FRONTIER SPIRIT to describe it. They formed the very basis of our entire educational system and at that time as much education took place in the home as it did in the formal setting of a classroom.

In the first ten years of Showa I was being reared by a father born in Meiji 14 and a mother born in Meiji 23 who had grown up in that era and was in an area so sparsely settled that our nearest neighbor was twelve kilometers distant. We had to live by those precepts to survive.

Now in the early 1900's the lower school classroom teaching in the USA consisted of reading, writing and arithmetic. The school was a place for

formal training to enable people to gain an education away from the classroom and to continue that education throughout their lives. Teachers were dedicated persons who gave their all for the value of their students with monetary interest in only sufficient money to allow them to carry on their chosen profession. Then came on the scene a man named John Dewey who decided that matters were not being adequately dealt with by the schools and there began an encroachment upon that which had been left to the parents to teach (and I must say that most of the parents were so weak as to take the “easy way” and abdicate their responsibilities) and the introduction of “permissiveness,” insofar as students, were concerned.

It is necessary for the reader to understand that in the USA education is handled on a very local level with political entities called Independent School Districts proliferating the country, sometimes as many as 25 servicing a county of 10,000 population. There are no national standards prescribed by governmental agencies and only through the fairly recent introduction of testing procedures is any standard fixed for college entrance. Each lower and upper school sets its own requirements for graduation to a very large extent. No national standard for graduation at any level, including college, exists.

Now this new permissiveness brought with it more functions of the schools (bands, football teams, girls’ drill teams, etc.) and more hours were required to be spent at the school grounds.

In this writer’s opinion the public school system in the USA has developed into a giant babysitting industry, giving “social promotions” from grade to grade with no real learning by the students, and has developed a mass of soft, illiterate group of young adults who are fit only for a lifelong government subsidy, unemployment or a life of crime upon graduation.

The “permissiveness” alluded to earlier reforms to “elective” courses beginning even in lower school for which credit toward graduation is given (examples are band, shop, cooking and other matters that are best left to home study or at least made extra-curricular.)

Teachers are and have long been unionized at the lower levels and are turned out by colleges that grant “Education” degrees based on the precept that no knowledge of the subject taught must be had by the teacher, only a knowledge of “how to teach.”

I grew up learning English in the eighth grade by diagramming sentences the whole year. When I reached the University of Texas I had a compulsory course in English taught by “modern” memory methods and used my time thus saved on serious study.

Under the old system in the USA, disciplinary matters were taken care of by paddling and decorum in the classroom obviated that except in extreme cases. Now no teacher may touch a student and discipline is absent from most schools, even to the point that students at middle and upper school levels arrive on the school grounds with concealed knives and even pistols and of course drugs are extremely prevalent even extending down to the lower school level.

Dress codes are such that hair may be worn any length by either sex and classroom attire is “hippie” by nature. Even the instructors appear in clothing that is suitable only for the rag bag. (I often think of the contrast with Professor Masanobu Tsuge’s Kogakkan High School where a mirror is mounted in the stairwell for his neatly uniformed charges to check their appearance.)

Gone is the pride of appearance and achievement of earlier years, replaced with bureaucratic babysitting of persons who achieve adulthood without

ever having achieved any accomplishment other than minimum attendance.

This is what John Dewey brought to USA education. Why was it done is the question. Recall the multitudes of Independent School Districts. Know that they are supported by ad valorem (property) taxes and know that they can issue long term interest bearing bonds for sale to private individuals for buildings and grounds improvements. (Interest payments on such indebtedness amounted to \$ 2, 528, 000, 000. 00 (U. S.) in 1979.)

Does it not stand the test of reason that expanded activities require expanded facilities which require borrowed money to build ? Yes, again we see the intrusion into the USA system of what I have often previously (in other writings) referred to as a selfish money grubbing clique, with the ability to instantly take citizenship elsewhere because of their religious belief, extending worldwide for their own personal gain at the expense of the people of the world. This is the same group that brought Japan her constitution of 1946 and ever encroached on the world for financial gain.

A by-product of this “modern” method of teaching was the “animalization” of the USA which has grown by leaps and bounds. As a result of the teaching philosophy of “permissiveness”, the same thought processes were passed to the students and family, home, duty to country, modesty, decorum—all were forgotten and lost. Pride in achievement of the individual gave way to the constant quest for money and so-called “conveniences”. The by-product of the new education was the industrial and business conquest of a nation by that same group whose primary concern in the beginning, in the opinion of this writer, was interest paid on money loaned—the medieval word for that was usury.

I am glad to say that there are still some private school systems in the USA that are not in their clutches and that many Americans graduated the

public schools before this system reached them (though we are now aging) and that many more graduate from private schools with doctorates, still imbued with what I have termed the “Frontier Spirit” which is in truth and infact the same as the “Meiji Spirit” I found so well expounded in the Kyoiku Chokugo.

The reader will ask himself, why did this American write this article for publication in Japan. I can only say that as bad as things are now concerning public education in Japan, the people there have seen nothing yet as to what will certainly happen unless constitutional reform is had there, the Kyoiku Chokugo reinstated for all students in Japan and this clique with its many tentacles expelled from Japanese life.

Several months ago Professor Emeritus Michitaro Shidehara sent me a copy of a book in Japanese, published in Japan, entitled by “あるユダヤ人の懺悔, 日本人に謝りたい” (モルデカイ・モーゼ著 久保田政男訳) an American Jew, which explains how and why certain things were done and how history was caused to happen by this self-same clique. The book is excellent and I recommend it to all as required reading to understand the problems Japan has faced for more than 30 years. The fault with the book is that it treats all as history of the past and does not explain that the same group even now continues its same methodology worldwide, most of all in the USA, for the same purpose, economic subjugation of the World.

It is my devout prayer that more scholars and people in Japan will look beneath the tip of the iceberg that is so visible to them and understand the tremendous mass of the underlying problem confronting them.